『俳諧翁の友』の実態と地域資料としての位置づけ

木下朋美*, 綿抜豊昭*

The actual situation and position as regional document of “Haikai Okina no Tomo”

Tomomi KINOSHITA , Toyoaki WATANUKI

抄録

『俳諧翁の友』は明治期に下総で刊行された俳諧雑誌である。『俳諧翁の友』は高岡鶴松が編集し，その撰には俳諧の宗匠である東旭斎も関わっているが，これまで研究者によって本書が詳しく取り上げられることはなかった。本稿は『俳諧翁の友』を分析し，その実態と地域資料としての位置づけを考察する。

明治25年から明治26年にかけて刊行された10点の『俳諧翁の友』を対象として調査したところ，以下のことが明らかになった。

（1）現存している『俳諧翁の友』をみると，少なくとも第60回まで，5年間にわたって継続して刊行されていた。

（2）『俳諧翁の友』への投稿料として少なくとも平均2円前後が入っていた。

（3）出版地である下総国香取郡香取村（現在の千葉県香取市）からの投稿が最も多い。

（4）現在の四国，九州地方からは特定の地域を除いてほとんど投稿されていなかった。

以上のことから，今まで研究や分析が行われていなかった『俳諧翁の友』が，現在の千葉県香取市にとっての重要な地域資料になると考えられる。

Abstract

“Haikai Okina no Tomo” is a magazine that has been published in the Meiji era, Shimousa. It was edited by Takaoka Tsurumatsu, and Azuma Kyokusai who was a master of Haiku in the Meiji era. In this paper, we analyzed “Haikai Okina no Tomo” and discussed its actual condition and position as a regional documents. We researched 10 pieces of “Haikai Okina no Tomo” published from 1892 to 1893 and revealed followings:

1. “Haikai Okina no Tomo” was published serially until at least No.60 lasted for 5 years.
2. The publisher earned at least about 2 yen as submission fee of “Haikai Okina no Tomo”.
3. The highest number of contributor is from Katori village, Shimousa (current Katori, Chiba Prefecture), where the publisher has pleased in.
4. There were few contributions from Shikoku and Kyushu district except for some especially areas.

Our conclusion is that “Haikai Okina no Tomo” is one of important regional documents for Katori city, Chiba Prefecture.

*　筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
筑波大学図書館情報メディア系
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba
Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

1. はじめに

本稿は，明治期に下総で発行された俳諧雑誌『俳諧翁の友』（以下，『翁の友』）に，どのような地域からどのような人が俳句を投稿していたかを調査したものである。それによって，『翁の友』の実態と，地域資料としての位置づけを考察した。

明治期の様々な俳諧雑誌に目を通すと，当時は郵便を中心としたネットワークが形成されており，様々な地域から俳諧雑誌への俳句の投稿が行われていたことがわかる。俳諧に関する研究は，そのほとんどが表現に関するものであるが，俳書に着目して当時の俳文芸を考察したものとして，河合[1]の研究があげられる。河合は『明治俳諧金玉集』を題材に，収録されている作品の地域や収録作品の形式を分析することによって，19 世紀末の日本の姿や地方俳壇間の繋がり，地方俳壇と中央俳壇の関係などを考察している。

このように，資料を 1 点ずつ取り上げ，投稿状況や収録作品の投稿者の居住地域を中心に分析していくことによって明治期の文化交流の全国的な実態を明らかにする研究は，歴史学や文学の分野で大きな意義がある。また，歴史学や文学の分野だけでなく，当時の文化交流がどう行われていたか読み取ることができる地域資料の分析という観点で，図書館情報学においても意義があると考えられる。

最終的には明治期の複数の俳諧雑誌の分析を通して全国的な投稿状況や文化交流の実態を把握することが目的であるが，本稿では最初の段階として，『翁の友』を取り上げ，収録作品の投稿状況を分析した。『翁の友』を題材としてその実態について調査した研究は現在まで行われていない。本稿の目的は，『翁の友』を題材にした調査を通して，当時の投稿状況や掲載状況の実態を明らかにすることである。

2. 研究方法

本稿の研究方法は，『翁の友』を調査対象とした文献調査である。最初に，代表的な参考資料を用いてこの俳諧雑誌がどの程度の期間に刊行されていたか『翁の友』の刊行年および廃刊年を調査した。『日本近代史辞典』の「明治主要新聞・雑誌一覧」[2]および『明治の文芸雑誌　その軌跡を辿る』の「明治期雑誌略年表」[3]，『明治文化全集　第 18 巻』の「明治雑誌年表　明治元年～明治 22 年」[4]を調べたが，いずれも『翁の友』についての記載はなく，刊行年，廃刊年ともに未詳である。続いて，『翁の友』が日本にどの程度現存しているかを調査した。まず，大学図書館の所蔵をみると，検索する限りでは，東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫に所蔵されていた。しかしそこに所蔵されているものも，刊行されたもの全てが揃っているわけではなく，第 23 回，第 27 回，第 30 回から第 37 回，第 53 回，第 56 回から第 58 回と，まばらであった。また，天理大学附属天理図書館には第 8 回，第 18 回から 60 回，号外と，比較的網羅的に『翁の友』が所蔵されていた。さらに九州大学総合研究博物館のデジタルアーカイブによると，「宇土細川家文書」にも第 9 回が所蔵されていた[5]。次に国立国会図書館サーチ（NDL サーチ）で公共図書館の所蔵を調べたが，所蔵している図書館はなかった。以上から，天理大学附属天理図書館の所蔵状況が比較的網羅的ではあるものの，現在『翁の友』の全巻は日本の大学図書館，公共図書館には現存していないと推測される。

『翁の友』がいつ発刊されたかは定かではないが，第 51 回の冒頭に「祝翁の友再刊」という記述があることから，『翁の友』は少なくとも 1 度刊行が中断され，その後復刊したことが伺える。また，筆者（綿抜）が所持している『翁の友』と天理大学附属天理図書館の所蔵状況を併せ見ると，第 60 回以降の『翁の友』の存在が伺えないことから，『翁の友』は第 60 回から発刊されていなかったのではないかと推測できる。

本稿の調査では，断片的な巻号の投稿状況を見るよりも，ある程度長期間かつ継続している巻号を対象とした方が，目的に合った調査が行えると考えた。そのため，本稿の調査では『翁の友』研究の第一段階として，『翁の友』が再刊した第 51 回から，発刊されなくなったと推測される第 60 回までの期間の投稿状況の実態を調べることとし，筆者（綿抜）が所持している第 51 回から第 60 回の全 10 点を対象として文献調査を行った。

具体的には，『翁の友』の各巻号に俳句を投稿した俳人の地域と名前を集計し，投稿した地域の特徴や，投稿者の傾向を分析した。また，出吟規則から投稿料がわかる（後述）ことから，『翁の友』を編纂する際に投稿者から受け取る投稿料についても分析した。

なお，本稿は『翁の友』の投稿状況を分析し，当時の実態を把握するものであるため，投稿された作品の内容には言及しない。

2.1 『翁の友』の概要

『翁の友』は，筆者（綿抜）が所持している第 51 回から第 60 回を見る限りでは，高岡鶴松（下総国香取郡香取村）

が編集し，翁友社（下総国香取郡香取村大字下小野 1964 番地）が発行したものであり，発行兼印刷者は尾形清蔵（下総国香取郡神里村大字木内 1121 番地）である[6]。各巻号の印刷・出版時期は表 1 のとおりである。

表 1. 各巻号の印刷・出版時期

巻号	印刷	出版
第51回	明治25(1892)年 6月24日	明治25(1892)年 6月25日
第52回	明治25(1892)年 7月26日	明治25(1892)年 7月27日
第53回	明治25(1892)年 8月24日	明治25(1892)年 8月25日
第54回	明治25(1892)年 9月25日	明治25(1892)年 9月26日
第55回	明治25(1892)年 10月30日	明治25(1892)年 10月31日
第56回	明治25(1892)年 11月27日	明治25(1892)年 11月28日
第57回	明治25(1892)年 12月26日	明治25(1892)年 12月27日
第58回	明治26(1893)年 2月24日	明治26(1893)年 2月25日
第59回	明治26(1893)年 4月24日	明治26(1893)年 4月25日
第60回	明治26(1893)年 7月30日	明治26(1893)年 7月31日

調査対象となった『翁の友』の本文は「文音の吟」,「闘句」,「新聲（新声）」,「餘興（余興）」,「別欄」で構成されていた。また，独立した項目にはなっていなかったが,「歌仙」も掲載されており，出吟規則には「歌仙」を投稿する場合の規則も示されている（後述）。

本稿の調査では，投稿作品の内容には言及せず，投稿作品の投稿者やその居住地域を分析する。そのため，特定のテーマについて競うために投稿者が限られている「闘句」と，おなじく投稿者が限定される「歌仙」は調査対象から除外し,「文音の吟」,「新聲（新声）」,「餘興（余興）」,「別欄」に対象を限定して，調査を行っている。

10 点とも，見返し上段には「俳諧翁の友出吟規則」があり，出吟規則（投稿にあたっての条件）が記載されている。また，第 51 回から第 54 回までは，見返し下段右に翌々月以降の「闘句」の配題と評価者が示されている。そして，第 51 回から第 59 回までは，見返し下段左には，発行所，編纂者，発行兼印刷者の住所および氏名，印刷日と発行日が示されており，第 60 回にのみ，それらに加えて印刷者と印刷所が発行者とは別に記載されている。

2.2 俳諧宗匠

本節では,『翁の友』に名前が見られる俳諧宗匠[7]（以下，宗匠）について説明する。本稿で調査対象にした『翁の友』には，出吟規則などに 8 名の宗匠の名が見られた。対岳堂箭浦，東旭斎，大主耕雨，長尾真海，早苗庵知碩，逸窓，青鶴，蹄雪庵伯志である。

対岳堂箭浦は, 生年天保 8（1837）年, 没年明治 39（1906）年である。幕末から明治時代の俳人であり，東京日本橋に居住して絵の具商事務所の組合長を務めるかたわらに俳諧の判者を務めていた。俳画会創立に尽力した人物である。下総海上郡の出身であり，本名は小崎由兵衛である[8]。

東旭斎は，生年文政 2（1822）年，没年明治 30（1897）年である。下総佐原の出身で，江戸後期から明治時代の俳人である。江戸の大江由誓の門人であり，松尾芭蕉の足跡をたどって，奥羽，北陸，畿内，東海道と吟遊の旅をかさねた。門人に高岡逸叟がいる。名は胤考, 字は思敬, 通称は善太佐衛門である。別号に声画庵, 無耳坊[9]がある。『翁の友』では声画庵旭斎の俳号を使用している。

大主耕雨は，生年天保 6（1835）年，没年大正 4（1915）年である。幕末から明治時代の神職兼俳人である。伊勢の出身であり，伊勢神宮主典を務めた。京都の堤梅通らに学び，文久 2（1862）年に二条家の俳諧の席にくわえられた。本姓は白米，名は光穆，通称は織江であり，別号に為豊園がある。句集に『時雨集』などがある[10]。『翁の友』では為豊園耕雨の俳号を使用している。

長尾真海は, 生年万延元（1860）年, 没年明治 45（1912）年。明治時代の俳人である。香川県白鳥村の真言宗千光寺の住職も務めた。俳諧を八木芹舎に学んだのちに還俗して俳諧教風社をおこし，俳誌『俳諧廼潮』を発行した。讃岐の出身である。名は憲澄, 別号に翠浦堂, 南無庵（6 代）がある[11]。『翁の友』では翠浦堂真海の俳号を使用している。

早苗庵知碩は，生年 1814（文化 11）年，没年 1901（明治 34）年である。本名は加藤多蔭という。俳句の宗匠で，通称吉重，雅号は麻麦園・長水処・早苗庵・多陰斎・蠖窟・蔵六舎・弘斎がある。山名郡中野村の出身であり，同郷の先輩である鳳嶺に誘われ，佐野郡山口村汐井川原の嵐牛[12]の門に学んだ。江戸時代末期の遠江国代表俳人嵐牛門下の四天王の一人となり，門人数百人を育てたといわれている[13]。

逸窓，青鶴，蹄雪庵伯志については，逸窓と青鶴は下総国の人物であり，伯志は東京の人物であったことは『翁の友』から読み取れたものの, それ以外の情報は『翁の友』からも，それ以外の文献からも見つけることができなかった。

3. 調査結果

3.1 出吟規則

『翁の友』の投稿句数などの集計をみる前に，出吟規則をみていく。第 51 回から第 60 回にかけて，出吟規則はすべて以下のとおりであった。

一新聲　一句加入（集冊一部送ル）金六銭以上一句毎ニ金貳錢増／歌仙壹卷加入金三拾五錢仝壹折金貳拾五錢／〆切ハ毎月十五日仝二十五日出版配送

ス／新聲ハ半ヶ年カ或ハ壹ヶ年分ヲ纏メ御申込ヲ乞フ

一餘興　題富季随意五句一組八錢以上一組毎ニ金貳錢増／景品天宗匠染筆半切掛地及俳諧五百題一部地人仝掛地及俳諧七部集一部ツツ番外十客仝掛地一葉ツツ送呈ス／郵税一切社辨／闘句入花一句金十錢二句以上一句ニ付金五錢

ここには，『翁の友』に俳句を投稿する場合，どのような規則が設けられているかが構成ごとに示されている。本稿の調査では，「文音の吟」，「新聲（新声）」，「餘興（余興）」，「別欄」に対象を限定したが，対象としなかった「歌仙」，「闘句」についても紹介する。

この出吟規則には，まず「新聲（新声）」に投稿する場合は，投稿者は 1 句あたり 6 銭払うことが定められ，2 句以上送る場合は 6 銭に加えて 1 句ごとに 2 銭ずつ増額される。また，半年かあるいは 1 年分をまとめて申し込むことが望まれていることがわかる。

次に「歌仙」に投稿する場合は，1 巻に投稿するにあたり金 35 銭払うことが定められている。それ以上はひとつの歌仙あたり 25 銭ずつ増額されることがわかる。

そして投稿の締切りは毎月 15 日である旨が定められ，同月の 25 日に出版配送されることがわかる。

次に「餘興（余興）」に投稿する場合は，題は季節ごとにいつでも 5 句 1 組で 8 銭払うことが定められ，5 句以上投稿する場合は 1 組（5 句）ごとに 2 銭ずつ増額されることがわかる。この「餘興（余興）」では投稿句数に応じて「天」，「地」，「人」，「番外十客」の賞が設けられ，それにあわせた景品が出るようである。その景品は，まず「天」は宗匠の筆と半切掛の布地および『俳諧五百題[14]』1 部を贈呈され，「地」および「人」は宗匠の布地と，『俳諧七部集[15]』1 部を贈呈される。また「番外十客」は宗匠の布地が 1 枚ずつ贈呈されることがわかる。その景品の送料は一切翁の友社が負担する旨が定められている。

最後に「闘句」に投稿する場合は，入選作を刷り物にする料金を 1 句につき 10 銭払うことが定められ，2 句以上投稿する場合は 1 句あたり 5 銭ずつ増額されることがわかる。

3.2　各巻の投稿句数と投稿料

本節では，『翁の友』の各巻における投稿句数と投稿してきた人数および投稿料について述べる。各巻における句の投稿句数と投稿者数は表 2 のとおりである。

表 2.　各巻の投稿句数と投稿者数

巻号	投稿句数	投稿者数
第51回	236	151
第52回	132	101
第53回	187	128
第54回	188	138
第55回	213	139
第56回	195	149
第57回	201	152
第58回	213	144
第59回	169	148
第60回	180	118
合計	1,914	1,368

第 51 回から第 60 回までにおいて，あわせて 1,914 句の投稿があり，投稿者数は 1,368 名だった。表 2 から，どの巻にも 100 名以上からの投稿があることがわかる。

3.1 節で述べたように，『翁の友』へ俳諧を投稿するためには投稿料が必要である。本稿の調査で使用した『翁の友』の出吟規則からは，「新聲（新声）」と「餘興（余興）」に投稿する場合に投稿料がかかることがわかる。そこで，「新聲（新声）」と「餘興（余興）」に投稿された句数と投稿者数，それらにかかる投稿料を調べた。表 3 は「餘興（余興）」への投稿句数，投稿者数，投稿料の合計をまとめたものである。投稿料は 3.1 節の出吟規則と「餘興（余興）」への投稿句数を元に筆者（木下）が算出したものである。

表 3.「餘興（余興）」への投稿句数，投稿者数，投稿料

巻号	投稿数	投稿者数	投稿料
第51回	78	29	2円40銭
第52回	40	29	2円8銭
第53回	63	30	2円44銭
第54回	45	26	2円
第55回	13	12	96銭
第56回	55	34	2円72銭
第57回	48	29	2円32銭
第58回	48	33	2円64銭
第59回	7	3	24銭
第60回	74	37	2円98銭

第 55 回や第 59 回は，「文音の吟」や「別欄」への投稿が多く，「餘興（余興）」への投稿が少なくなっていた回であるため，投稿料は他の巻よりも安くなっている。しかし全体をみると，第 51 回から第 60 回までにおいてかかる投稿料は平均で 1 円 88 銭であり，各回 2 円前後の投稿料が翁の友社に納められていることがわかる。

また，「新聲（新声）」は，第 58 回にのみ存在し，40 地域 109 名から合計 110 句の投稿があった。投稿料は 6 円

56 銭であった。

3.3 地域別投稿状況

3.3.1 全国的にみた投稿状況

本節では，地域別にみた投稿状況について述べる。明治期は廃藩置県が行われているため，都道府県で表示するのが本来であるが，『翁の友』への投稿では，旧国名が多く使われているため，本稿での分析も旧国名で行っている。

調査対象とした 10 点の『翁の友』の収録作品の投稿地域と投稿句数を昇順に並べたものが表 4 である。なお，下総国の中でも細分化された地域名によって投稿されていた句も存在した。そのため，地域別投稿状況を集計する際には，投稿地名が「下総」となっている句のほか，下総国の細分化された地域名によって投稿されていた句も「下総」に該当するものとして集計している。また,「東京」,「横濱」,「京都」,「兵庫」,「仙臺」,「大阪」,「上毛」という地名もあったが，それらは旧国名との対応が複雑であるため，該当地域に統合せずそのまま分類している。

表 4 をみると，翁の友社の所在地である下総国からの投稿が最も多いことがわかる。全体に占めるその割合は約 20% であったが，他の地域と比べると格段に投稿句数が多くなっている。次いで投稿句数が多い東京は，当時は武蔵国の一地域であったが，『翁の友』では武蔵に含められず，独立した地域として分類されている。

投稿句数の多い地域は関東地域だけでなく，越後，遠江，陸中，伊勢といった，関東から離れた地域からも多く投稿されていることがわかる。

また，日本を旧国名で分けると 81 の国があるが，今回の調査では『翁の友』に 65 の国や地域からの投稿があったことがわかった。

また，投稿の全国的な分布を調べた。各地域を五畿八道に準じた 9 つのブロックに分け，分布をまとめたものが表 5 である。

3.3.2 下総国における投稿状況

さらに，下総国における細分化された投稿地域の状況を表 6 に示す。

この表では「下総」としか地名の記述がなく，下総の中でさらにどの地域なのかが厳密には不明であったものが非常に多かった。しかし，わざわざ細分化された地域名で投稿していた点に何か意図があったと考えられる。そこで，細分化された地域のみ取り上げ，それぞれの地域についてみておく。

油田（あぶらた），内野（うちの）織幡（おりはた），木内（きのうち），清里（きよさと），八本（やもと），龍谷（りゅうざく）は，現在の千葉県香取市小見川区（旧小見川町）に属する地域である。荒北（あらきた），高萩（たかはぎ）は，現在の千葉県香取市栗源区（旧栗源町）に属する。また，大根（おおね），下小野（下小ノ）（しもおの），新市場（にいちば）は，現在の千葉県香取市（旧佐原市）に属する地域である。野田は，現在の千葉県野田市に属する地域である。本郷は，現在の千葉県船橋市に属する地域である。白井（しろい）は現在の千葉県白井市と現在の香取市白井地区の，2 つの「白井」という地名があったが，他の細分化された地域の傾向をみると，現在の香取市白井地区に該当する可能性が高いと考えられる。

地域ごとの投稿句数でみると，現在の千葉県香取市である油田，内野，織幡，木内，清里，八本，龍谷，荒北，高萩，大根，下小野（下小ノ），新市場からの投稿句数が合計 46 句になる。よって，ひとつの地域からの投稿句数は少ないものの，下総国全体でみると，『翁の友』を発行した翁の友社の所在地である，香取郡香取村（現在の千葉県香取市）からの投稿が，下総国の中でも多くなっている傾向がみられる。

地域ごとの投稿をみると，白井からの投稿は，『翁の友』第 53 回から第 56 回にわたって見られ，特定の俳人が多く投稿するのではなく，複数人が少数ずつ句を投稿していた。また，下小野からの投稿は，『翁の友』第 54 回，57 回と第 59 回に見られ，それぞれに投稿句数は少数ではあるが，日本坊という俳人が多く投稿していた。

表 4．投稿地域（投稿句数順）

順位	地名	句数	全体に占める割合
1	下総	438	22.9%
2	東京	149	7.8%
3	武蔵	92	4.8%
4	越後	84	4.4%
5	遠江	83	4.3%
6	陸中	77	4.0%
7	伊勢	74	3.9%
8	常陸	53	2.8%
8	相模	53	2.8%
10	尾張	51	2.7%
11	羽前	48	2.5%
12	羽後	42	2.2%
13	京都	41	2.1%
14	加賀	40	2.1%
15	十勝	37	1.9%
16	上野	36	1.9%
16	上総	36	1.9%
18	近江	33	1.7%
19	大阪	26	1.4%
20	讃岐	25	1.3%
21	周防	24	1.3%
22	信濃	23	1.2%
23	下野	22	1.1%
23	駿河	22	1.1%
25	紀伊	21	1.1%
26	後志	19	1.0%
27	陸奥	18	0.9%
27	伊豆	18	0.9%
29	磐城	17	0.9%
29	三河	17	0.9%
31	阿波	16	0.8%
32	美作	14	0.7%
32	佐渡	14	0.7%
32	岩代	14	0.7%
35	越前	11	0.6%
35	肥後	11	0.6%
37	因幡	10	0.5%
38	豊後	8	0.4%
38	能登	8	0.4%
40	伯耆	7	0.4%
40	天塩	7	0.4%
42	日向	6	0.3%
42	兵庫	6	0.3%
42	出雲	6	0.3%
42	伊予	6	0.3%
46	備前	5	0.3%
46	長門	5	0.3%
46	丹波	5	0.3%
49	上毛	4	0.2%
49	神戸	4	0.2%
49	甲斐	4	0.2%
49	石見	4	0.2%
49	安房	4	0.2%
54	越中	3	0.2%
54	美濃	3	0.2%
56	石狩	2	0.1%
56	横濱	2	0.1%
56	陸前	2	0.1%
59	大和	1	0.1%
59	豊前	1	0.1%
59	但馬	1	0.1%
59	仙臺	1	0.1%

表 5．国内 9 ブロックの分布

ブロック	地名	句数	宗匠	
畿内	山城	0		
	大和	1		
	河内	0		
	兵庫	6		
	神戸	4		
	和泉	0		
	摂津	0		
	京都	41		
	大阪	26		
東海道	伊賀	0		
	伊勢	74	耕雨	
	志摩	0		
	尾張	51		
	三河	17		
	遠江	83	知碩	
	駿河	22		
	伊豆	18		
	甲斐	4		
	相模	53		
	武蔵	92		
	東京	149	鶯洲，箭浦，伯志	
	横濱	2		
	安房	4		
	上総	36		
	下総	438	旭斎，青鶴，逸窓	
	常陸	53		
東山道	近江	33		
	美濃	3		
	飛騨	0		
	信濃	23		
	上野	36		
	上毛	4		
	下野	22		
	羽前	48		
	羽後	42		
	岩代	14		
	磐城	17		
	陸前	2		
	陸中	77		
	陸奥	18		
	仙臺	1		
北陸道	若狭	0		
	越前	11		
	加賀	40		
	能登	8		
	越中	3		
	越後	84		
	佐渡	14		
山陰道	丹波	5		
	丹後	0		
	但馬	1		
	因幡	10		
	伯耆	7		
	出雲	6		
	石見	4		
	隠岐	0		
山陽道	播磨	0		
	美作	14		
	備前	5		
	備中	0		
	備後	0		
	安芸	0		
	周防	24		
	長門	5		
南海道	紀伊	21		
	淡路	0		
	阿波	16		
	讃岐	25	眞海	
	伊予	6		
	土佐	0		
西海道	筑前	0		
	筑後	0		
	豊前	1		
	豊後	8		
	肥前	0		
	肥後	11		
	日向	6		
	大隅	0		
	薩摩	0		
	壱岐	0		
	対馬	0		
北海道	渡島	0		
	後志	19		
	胆振	0		
	日高	0		
	石狩	2		
	天塩	7		
	北見	0		
	十勝	37		
	釧路	0		
	根室	0		
	千島	0		

表 6. 下総国における投稿状況

地名	句数	現在の地名
下総	367	―
油田	2	千葉県香取市 小見川区 （旧小見川町）
内野	4	
織幡	3	
木内	6	
清里	2	
八本	3	
龍谷	3	
荒北	1	千葉県香取市 栗源区 （旧栗源町）
高萩	1	
大根	2	千葉県香取市 （旧佐原市）
下小野（下小ノ）	18	
新市場	1	
野田	4	千葉県野田市
本郷	1	千葉県船橋市
白井	20	千葉県香取市白井地区
計	438	

3.4 投稿者別投稿状況

本節では，投稿者による投稿状況をみていく。『翁の友』第 51 回から第 60 回において投稿句数が多かった人物をそれぞれ 3 名ずつあげてまとめたものが表 7 である。表内の括弧は，投稿者地域と投稿句数である。また，10 点全巻をまとめ，投稿者別の投稿句数を調査した。投稿句数が多かった投稿者の上位 10 名を示したものが表 8 である。

表 7. 投稿者別投稿状況 (各巻上位 3 名)

巻号	投稿者名（地域，句数）		
第51回	雅堂（陸中，14句）	雨笠（下総，10句）	梅瓶（羽前，9句）
第52回	雅堂（陸中，5句）	青鶴（下総，5句）	逸窓（下総，4句）
第53回	静香（陸奥，8句）	金太（武蔵，7句）	祥松（十勝，5句）
第54回	南枝（陸中，6句）	素鳥（下総，5句）	逸窓（下総，5句）
第55回	逸窓（下総，15句）	青鶴（下総，10句）	旭斎（下総，7句）
第56回	琴静（後志，7句）	祥松（十勝，6句）	樂友（武蔵，4句）
第57回	露月（陸中，5句）	祥松（十勝，4句）	晴浦（伊勢，4句）
第58回	金太（武蔵，6句）	樂水（丹波，5句）	晴浦（伊勢，4句）
第59回	木圭（加賀，8句）	日本坊（下小野（下総），3句）	逸窓（下総，3句）
第60回	晴浦（伊勢，11句）	祥松（十勝，5句）	雲外（豊後，4句）

表 8. 投稿者別の投稿句数（上位 10 名）

順位	地名	投稿者名	投稿句数
1	下総	逸窓	40
2	十勝	祥松	37
3	下総	青鶴	33
4	陸中	雅堂	29
5	武蔵	金太	28
6	下総	旭斎	26
7	伊勢	晴浦	24
8	羽前	梅瓶	19
9	後志	琴静	17
10	下野	鴨水	16

3.3 節で述べた地域別の投稿状況では，『翁の友』を出版している下総国からの投稿が最も多いという結果がみられた。しかし表 7 をみると，下総国に住む人物からの投稿が多く見られる一方で，陸中の雅堂，南枝，露月や陸奥の静香といった，現在の東北地方の有名な俳人や，十勝の祥松や後志の琴静といった現在の北海道を居住地とする俳人からの投稿も多くみられた。

また，表 8 をみると『翁の友』10 点を全体的にみてもっとも投稿句数が多かったのは下総の宗匠である逸窓であり，同じく宗匠である青鶴や旭斎も上位に位置している。しかし，宗匠以外で下総からの投稿が多かった俳人はさほど多くなく，表 7 と同様に，下総以外の地域からの投稿者が上位に入っている。

4. 考察

4.1 刊行期間

『翁の友』について，これまで詳細に述べられた文献は見られない。現在所蔵が確認されているものも，刊行された全巻の存在は見当たらないものの，少なくとも第 60 回までは刊行されたことがわかった。表 1 から，およそ 1 ヶ月に 1 点刊行されていたことがわかるが，そこから少なくとも 5 年間にわたって継続して刊行されたことがわかる。

4.2 投稿料

3.2 節で述べたように，表 3 から『翁の友』への投稿料として少なくとも 2 円前後が翁の友社へ収入として入っていたことがわかった。

当時の新聞の購読料が 28 銭 [16]，上野―青森間の鉄道旅客運賃が 3 円 64 銭 [17]，まんじゅう 1 個が 1 銭 [18]，自転車が 200 円 [19] などであったことと「餘興（余興）」および「新聲（新声）」の投稿料をふまえると，一人ひとりが支払う投稿料はさほど高額ではない。そしてさらに多く句を投

稿することで値段が安くなる仕組みであったために，多数の投稿作品が集まったことが推測できる。

ただし，この結果は『翁の友』に複数設けられていた構成の一つを見たものであるため，他にも投稿料が規定されていたが今回は調査から除外していた項目についても，どの程度の投稿料が納められていたか調査することが求められる。また，他の俳諧雑誌の投稿料を調査し，『翁の友』の投稿料と比較することも必要だろう。これらは今後の課題としたい。

4.3　投稿地域・投稿者

表 5 から，東海道と東山道（現在の関東，東海，東北地方）からの投稿が集中していることがわかる。また，東海道地域と南海道の讃岐には『翁の友』に携わっている宗匠が居住し，そこから多く俳句を投稿していたこともわかる。

反対に，南海道の大部分や西海道 (現在の四国，九州地域) からはほとんど投稿が寄せられていない。表 7，表 8 からは，投稿者別にみると，下総で投稿句数が多いのはそのほとんどが宗匠からの投稿であることがわかる。下総以外の地域でみると，表 5 をみた時と同様に，陸中や武蔵，伊勢といった現在の東海，東北地方に居住する投稿者が目立つ。また，伊勢は宗匠である耕雨が居住していることから，伊勢の晴浦は耕雨と何らかの関係があり，そこから投稿に至ったとも推測できる。

これらのことから，『翁の友』が刊行された明治 25 年から明治 26 年には，ある程度郵便制度が整備されてはいたが，『翁の友』を知っていた俳人や『翁の友』に関わっていた宗匠，あるいは彼らと交流があった俳人が中心となって投稿していたと考えられる。

表 6 から，『翁の友』の発行には，俳句の投稿が最も多い下総国香取郡香取村（現在の千葉県香取市）の俳人が重要な役割を果たしていること推測できる。また，下総国の俳人たちがわざわざ細分化された地域名で投稿した背景には，自分たちが『翁の友』の作成を担っているという意識や，地名に対する帰属意識のようなものを持って投稿している可能性が推測できる。

『翁の友』が刊行された当時，下総国香取郡香取村（現香取市）は，利根川支流上流域に位置していたため，水運による物資輸送の拠点となり，商業地として発展する一方で，台地を生かした桑苗栽培と養蚕業が盛んであった[20]。このことから，下総国香取郡香取村（現香取市）では，俳句をたしなむなどの文化的な趣味を持つことができる余裕のある環境が整っていたのではないかと推測する。

そのような環境の中で，文学史上では無名ではあるが，俳句をたしなむ人々が存在したことがわかる。また，彼らが東北地方や東海道地方の下総国以外の地域に居住する俳句をたしなむ人々と，俳諧雑誌を介して自分の詠んだ俳句を発表することによって交流を行っていたことが考えられる。本稿の調査結果によって，そういった人々の存在や人数，そして彼らが下総国を中心とした様々な地域から『翁の友』へ俳句を投稿していたことが明らかになった。

以上のことから下総国，特に香取郡香取村の俳諧を通して，下総に居住していた俳人や当時の俳諧文化を知る上での重要な地域資料として『翁の友』を位置づけることができる。

5.　おわりに

本稿では明治 25 年から約 1 年にわたって刊行された 10 点の『翁の友』を題材に，当時の投稿状況や掲載状況の実態を分析した。『翁の友』には，出版地である下総国香取郡香取村（現在の千葉県香取市）からの投稿が最も多く，それ以外の地域からは，『翁の友』に携わっている宗匠の居住地域からの投稿が多いことが明らかになった。以上のことから，今まで研究や分析が行われていなかった『翁の友』が，現在の千葉県香取市にとっての重要な地域資料になると考えられる。

また，『翁の友』が刊行された当時は，郵便という交流手段が発達していても，俳諧雑誌を介した交流は，『翁の友』が発行された地域とそこに関わる俳人や，彼らと交流があった俳人に限定されていたといえる。

今後の課題としては，『翁の友』に俳句を投稿していた宗匠らが活躍する地域の俳諧雑誌に，どのくらい下総国の俳人が投稿しているかを調査することで，下総国の俳人と他地域の俳人との間の交流の有無やその度合いをはかり，地域ネットワークの作られ方や文化交流の実態を明らかにすることがあげられる。また，天理大学附属天理図書館や東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫などに所蔵されているものも含めて，現在所在が明らかになっている全ての『翁の友』を分析し，『翁の友』の全体像を把握することも，今後の課題としてあげられる。

注・引用文献

[1] 河合章男．『明治俳諧金玉集』の考察：明治中期の俳文芸を伝えるメディア．図書館情報メディア研究．2005,

vol.3，no.1，pp.51-61.

[2] 京都大学文学部国史研究室日本近代史辞典編集委員会．“29　明治主要新聞・雑誌一覧”．日本近代史辞典．時野谷勝．東洋経済新報社 , 1958, pp.780-786.

[3] 杉本邦子．“明治期雑誌略年表”．明治の文芸雑誌 - その軌跡を辿る -．明治書院 , 1999, pp.303-310.

[4] 吉野作造．“明治雑誌年表”．明治文化全集　第 18 巻．吉野作造．合資会社日本評論社 , 1928, pp.575-606.

[5] 九州大学総合研究博物館. 九州大学デジタルアーカイブ．九州大学デジタルアーカイブ．http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/（2013-07-26 参照）

[6] 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫に所蔵されている『翁の友』第 23 回，第 27 回，第 30 回から第 37 回は，発行地が千葉県下総国香取郡佐原町となっており，発行兼編纂人は朝野利兵衛，印刷人は朝野泰尚となっていた。しかし内容が筆者（綿抜）の所持している第 51 回から第 60 回までとほぼ同じであったことから，現存している限りの初号である第 23 回と，筆者（綿抜）が所持している第 51 回以降では翁の友社の発行者や印刷者が変更になったものの，同じものであると考えられる。また，この変更は朝野利兵衛が隠退又は死するなどして，その後を高岡鶴松が継いだことによるものと考えられる。東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫に所蔵されている『翁の友』を加えての分析は別稿に譲る。

[7] 文芸・技芸などの道に熟達しており，人に教える立場にある人。特に，和歌・連歌・俳諧・茶道・花道などの師匠。

[8] 上田正昭ほか．講談社日本人名大辞典．株式会社講談社，2001，p.1075.

[9] 前掲 8，p.51.

[10] 前掲 8，p.372.

[11] 前掲 8，p.1349.

[12] 本名は伊藤清左衛といい，松尾芭蕉の流れを汲む俳人である。

[13] 磐田市立図書館．磐田の著名人｜発見！いわた｜早苗庵知碩．磐田市立図書館．http://lib.city.iwata.shizuoka.jp/iwata/chomei/sanaeanntiseki.html（2013-07-26 参照）

[14] 『古今俳諧明治五百題』。東旭斎が明治 12 年に編集した類題句集である。明治 14 年と明治 17 年に続編，続々編が刊行された。（鈴木円花，綿抜豊昭．『古今俳諧明治五百題』について．図書館情報メディア研究．vol.7，no.1，pp.27-33）

[15] 蕉門の代表的撰集「冬の日」「春の日」「曠野（あらの）」「ひさご」「猿蓑（さるみの）」「炭俵」「続猿蓑」を成立年代順にまとめたもの。芭蕉七部集とも呼ばれる。様々な編者や出版社が刊行していたため，『翁の友』で景品とされていた俳諧七部集はどの版のものかは不明である。

[16] 明治 24 年の朝日新聞（大阪）の月決め定価。朝刊のみ。（週刊朝日．値段史年表．朝日新聞社，1989，p.101）

[17] 明治 24 年の普通旅客運賃。（前掲 16，p.139）

[18] 駄菓子屋で売られている並物のまんじゅう 1 個の値段。（前掲 16，p.185）

[19] アメリカ製。実用車 1 台当たりの小売平均価格。（前掲 16，p.87）

[20] 香取市．“香取市ウェブサイト：香取市の特色，歴史など”．香取市ウェブサイト．http://www.city.katori.lg.jp/02profile/introduction/profile.html（2013-07-26 参照）

（平成 25 年 3 月 21 日受付）
（平成 25 年 8 月 21 日採録）